

——事実と真実は重ならねえよ

——わかった、わかった、すべて、調べればわかることだ。とにかく、2人とも来てもらおうか  
X氏は時計を視た。

そして、首を横に振った。

——もういいんです。終りにして下さい

——君、これは事件だよ、何がもういいだ

——単なる、どこにでもある、ちょっとした事故です。不注意です

——決めるのは、私たちだ

——ほら、見ろ。な、お巡りさん。わるいのは、この男さ。これで決まりだ。真実ってものが見えただろうが。俺はまったく関係ねえの。俺、行くからな

X氏は、ハンカチを手の甲にあてて、もう一度制服にむかって断言した。

——本当に、大丈夫です。私の不注意の事故でした。もう放っておいて下さい

——何をこわがっているんだ？

——こわがってるだって？ とんでもない

——俺はおびえてない、こわくもない

青年はまっ青な顔をして、拳を硬く握りしめていた。

X氏は、大きく深呼吸をして、感情の昂ぶりを鎮めると、静かな、落着きのある声で言った。

——さあ、もういいだろう。ぼくは左へ行く、君は右へ行きなさい。もう二度と会うこともないだろう。迷惑をおかけいたしました。怪我は会社の診療室で治療します

X氏は、静かな笑みを唇に浮かべて、何事もなかったように、制服と青年に頭を下げると、ゆっくりと歩きはじめた。X氏の背中に、青年の鋭い叫び声突き刺さった。

俺は、お前の正体を知ってるぞ!!

X氏は、決して振り返らなかった。

## 3

地下鉄の階段をのぼり終えた。

都市の中心には、高層ビルがいくつも聳えたち、水の王冠をつけて低く垂れこめた雨雲のなかに突入しているが、終日、垂直に降り続く雨に、花を思わせる傘の群れが咲き乱れても、眼は、地下鉄の壁から解放されたというふうでもなく、誰一人としてビル群を見上げる者はなかった。

低い地鳴りに似た音が都市の胎動だった。路上にはおびたらしい車と人があふれていて、交通は過剰をきわめていたが、あらゆるものが影を失っていた。都市は大きなゆらぎの波となって呼吸している。薄く、眼にも区別のつけがなくなった影は、夏の到来に備えて、どこかに姿を消してしま